

創刊110周年記念

誇れるふるさと

24地区リレー

〈vol.3〉

<小羽山① 特徴>

宇部市中央部に位置する小羽山地区は、1981年に上宇部、新川両地区の一部を併合して発足した。地区の面積は2.28平方キロと市内24地区で4番目に狭く、かつてミカン畑だった山野を造成してできた住宅地がその大部分を占める。住宅地は73〜76年に市土地開発公社が約90億円の事業費を掛けて整備し、当時は県内最大規模の造成地「小羽山ニュータウン」の名で売り出された。4月1日時点で3113世帯6249人が居住する。

ミカン畑切り開き宅地造成



小羽山地区を象徴する蛇瀬池と公営団地（蛇瀬池で）

デジタル技術でまちづくり

地区の中央には、鵜の島開作のかんがい用水を確保するために1732年に造られた蛇瀬池がある。周辺では1989年に市道請川王子線（テクノロード）が開通し、2001年には山陽道宇部下関線の開通に伴い、宇部インターチェンジの運用が始まるなど、交通の利便性が向上した。市中心部に近いこともあり、住みやすさを地域の魅力として挙げる人が多い。

一方、現在の高齢化率は市全体の33.6%を上回



小羽山

基本データ

- 面積2.28平方キロ (21位)
- 世帯数3113世帯

- 人口6249人 (14位)
(男2884人、女3365人)
 - 高齢化率37.2%
 - 小学校児童数299人
- ※世帯数などは2022年4月1日現在

る37.2%で、11年度と比較して16.7%上昇した。同地区が誕生して初期に移り住んだ住民の高齢化が進み、コロナ禍と相まって孤独や孤立の深刻化、地域のつながりの希薄化が課題となっている。

地区の地域づくり計画では、将来像に「一人ひと

りの絆を大切にしたい『安心・安全なまちづくり』を掲げる。同地区は障害の有無や年齢、国籍にとらわれず、すべての人が暮らしやすい地域づくりを進める市の「地域共生社会モデル地区」でもある。地域づくりを担う同地区コミュニティ推進協議会（婦木澄男会長）は、デジタル端末の普及とインターネット利用場面の増加を背景に、今年度から協議会内に「ICT（情報通信技術）ソリューション部会」を立ち上げ、世代間のデジタルデバイス（情報格差）の解消と新たな情報発信、交流機会の創出を狙う。婦木会長（75）は「既存の事業をやるだけでは時代遅れ。失敗を恐れず新しいものを取り入れながらまちづくりに取り組み、誰もが住みやすい地域をつくる」と力を込める。